

# 山王靈驗記繪卷

——蓮華寺本その他——

梅津次郎

現存する山王靈驗記と稱せられる繪卷としては、普通に沼津日枝神社所藏の一卷及び蓮華寺所藏二卷、井上侯爵家所藏一卷、生源寺所藏一卷が數へられる。右の内日枝神社が弘安十一年施入の奥書相當の製作年代を想定せらるゝに對し、以下の四卷はその製作も遙かに降り室町時代に屬するものであり、又その美術史料的价值ももとより高く評價さるべきものではない。従つて山王靈驗記繪卷としては日枝神社本の考察こそより重要なものではあるが、今は日本繪卷物全般に互る調査の一項目として、蓮華寺本以下の詞書を紹介すると共に、記載的な事項に併せて多少の覺書を附加へて置きたいと思ふのである。

先づ各卷の内容であるが、その詳細は別掲詞書に譲るとして、左に簡單なる摘要をしるす。

蓮華寺本、上卷

第一段 叡山第十代座主増命僧正の祈請により、山王東塔西谷龍尾の怪

山王靈驗記繪卷

巖を摧破せる靈驗談。

第二、三、四段 圓覺寺宗叡もと山門にありし時、山王の夢告により離山し圓覺寺の眞照僧都に就き遂に碩徳となりし話。及び加賀白山へ罷りし時山王靈鳥を遣して宗叡を守護せる話。

第五段 冷泉圓融帝の比、讃岐守經元任國に赴く途中難船し、子息一人助かりて山王の猿に養はれ、のち山に入りて得度せる話。

第六段 侍從大納言成通病患の時、祈禱せる湛秀已講の前に十禪師小女の姿にて現はれ、湛秀を戒むる話。

下卷

第一、二、三段 光明峯寺禪定大閑の息將軍たりし頃、訴訟の事ありて關東に下向せる女房、借錢に苦しみしを、鎌倉名越の山王に馮み奉りて救はるゝ話。

第四段 初め比叡に住山せし二荒山の大夫阿闍梨藏尊病死して閻王宮に至りしが、十禪師の加護により蘇生せる話。

第五段 貞應の比さる山門の修業者日吉地主權現の本地藥師佛に祈り病

癒えしが夢の告によりて横川に籠り三年の後臨終正念にして終れる話。  
第六段 嘉祿の比、或人日吉卯月祭に愛馬を借すを拒みたる爲、その馬逸走して日吉社に至り狂死せる話。

井上侯爵家本

第一段 第二十六代座主院源、山王に祈請して千僧供を受用せる話。  
第二段 暹賀、聖救の兄弟幼き頃、頭上に蜂の飛來れるを、巫女の託宣により蜂は山王の使者、比叡に上るべき由なるを知り、入山し遂に高德となりし話。

第三、四段 三井の頼豪、白河院の儲君を祈出せるに、戒壇建立の勅許なきを怨みて憤死し、太子又薨じ給ひしに、叡山の良眞僧正山王に祈請して皇子御誕生ありし話。

第五段 東塔東溪月藏房桓舜僧都、若かりし頃離山の思ひありしが、山王の夢想により榮花も願はず偏に往生淨土を欣求するに至りし話。

生源寺本

第一段 廣義門院正和二年安居院法印覺守を日吉社に參籠せしめられしによつて皇子降誕ありし話。

第二段 正應三年火災の際山王の御躰七鋪焼亡せざりし話。

第三、四段 大隅國住人帖佐の三郎信宗文永二年難船せるに際し、山王の猿丸山王堂の別當了仁等現れて救はれし話。

以上の如くその内容は叡山の僧侶の傳記を中心とせる日吉山王の靈驗談を集成せるものであつて、山門僧傳の別稱を以ても呼ばれたのである。後述する如く之等四卷は一聯をなすべきものと考へられ、もと何卷のものであつたかは詳かになし難いが、續群書類從 卷第五十、五十一に

日吉山王利生記<sup>卷九</sup>、續日吉山王利生記<sup>卷一</sup>の名のもとに載せられてゐる繪卷の詞書内容とは次の如き不可思議なる關係に在る。<sup>括弧内は類從本の卷次及段次</sup>

蓮華寺本上卷 第一段<sup>(第二卷・第一段)</sup>、第二、三、四段<sup>(第一卷・第五、六、七段)</sup>、第五段<sup>(ナシ)</sup>、第六段<sup>(第六卷・第三段)</sup>

同下卷 續類從本になし、

井上侯爵家本 第一段<sup>(ナシ)</sup>、第二段<sup>(第三卷・第一段)</sup>、第三、四段<sup>(第三卷・第九段、第六卷・第七段)</sup>

生源寺本は續日吉山王利生記と同本なること續類從本の奥書によつても明かである。よつて生源寺本は暫く措き、他の三卷の九卷本に對應する詞書を比較するに行文大略一致するものであり、兩者の間に密接の關係あるを知るのであるが、字句に多少の相違をも示し、又今この九卷本が果して完本なりや否やを問はずとするも、猶かゝる説話の序列の大異は兩者が異本であることを示すものであると思はれる。

更に之等を記録の上に現はれるものに顧みるに、言繼卿記天文十九年間五月十五日の條に

叡山月藏房祈僧法印、自禁裏被仰下、山王緣記十五卷持進之

の記事があり、續いて之に關する文字が散見するが、同年九月廿日の條に

日吉靈驗繪、先度之殘六卷披見之候了<sup>(中略)</sup>○自月藏房繪請取に<sup>三人</sup>使有之、一盞勸之、繪<sup>十五卷</sup>入櫃封付之渡了、同勅筆之名號天照皇太神宮、日吉八王子權現二幅、申調遣之、

の記事がある。即ち叡山東塔東谷の月藏坊に十五卷の山王靈驗繪があ

つたことが知られるのであるが、(註一)現在のところ之と現存繪卷乃至九卷本との直接的な關係の有無を明確にすることは出来ない。しかし其處に或る系統的な關係を想定することは却つて自然であり、現存本の原初に於ける卷數を示唆するものがあると思はれる。

茲に、既述の如く現存繪卷と九卷本の間には密接なる系統的關係が存在することは疑問の餘地を存しないのであるから現存繪卷の詞書成立を考察する場合、九卷本の詞書をも參考することは許されるであらう。

そこで先づ續類從の九卷本の中に左の如き詞を見出す。

程なく春宮御即位ありて、當社へ行幸有けり。(略)(中)かの御位の初より今に至まで、纔に二百餘年に及べり。年序不幾に(下)(第三卷・第七段)

之によつて考へるに、延久元年(西紀一〇六九)より二百年は文永六年(西紀一二六九)に當るが、二百餘年とあれば更に幾許の年を降るであらうか。之を生源寺本に省るに

正應三年十二月十六日安居院の法印の惣門の脇より火いてきて(中)正應のことなれば無下にまちかき事也(略)(第二・第三段)

の文字がある。續類從では此生源寺本を九卷本と離して「續」と冠してゐるが、文體より考へて其基礎を九卷本と同時的成立と見て恐らく差支なきものと思はれ、更に右の如く文辭の示唆する成立年代も同時的なものと考へて又支障なきもの、如くであつて見れば、先づかゝる山王靈驗談の集成された詞書(恐らくは繪卷も亦同時)の成立は鎌倉最末期から室町

最初期の内に於て粗く考へ得るもの、如くである。(註二)

しからば現に残存せる四卷は以上の考察に對して製作的には如何なる關係に立つものであらうか。先づ一應筆者の所傳等を明かにして置かう。

最初に蓮華寺本であるが、下卷々末に探幽が奥書して、

右畫兩軸者土佐之筆跡疑無  
之者也於余賀陰今枝近義爲  
乃祖追遠再興蓮華寺以寄  
附之永加常住靈物給仍需予  
片言故鑒證之耳

寛文三年五月廿三日 狩野法印探幽

とある。

井上侯爵家の一卷は各段詞の始めに古筆の極札を貼付するが、第一段「一條殿兼良公」、第二段「能阿彌」、第三、四段「金阿彌」、第五段「若州衆井上能登守忠英」とあり、尙左の如き折紙一通を附屬する。

詞書卷物

一條禪閣兼良公	第二十六代
東山同朋能阿彌	比叡山暹賀
金阿彌	中比山門に
若州井上能登守忠英	東塔東溪
右各眞蹟無疑者也	
午初冬上旬	

古筆了意印

繪の筆者の所傳に關しては、帝室博物館所藏の狩野會心齋の二摸本が参考せられる。(註三) 即ちその一は白描本で、之は寛文三年十二月十四日住吉廣通の摸寫せる本を會心齋が天保三年四月廿六日中信に再摸せしめたものであるが、その住吉の摸本の裏書に寂濟とあつたことが寫し留められてゐる。他の一本は井上家本の直摸と考へられる彩色本で増訂考古畫譜山門僧傳繪詞の條に載せるものがそれである。卷尾に會心齋が摸寫の由來と共に多少の考證を誌して居り、その全文は畫譜に載せてゐるが、之によつて又土佐光信筆の所傳があつたことが知られる。因みにこの跋に會心齋が云ふ住吉の摸本は前記白描本に當るものであらう。

最後に生源寺本であるが、今左の添狀一通を存する。

繪卷物詞書

延慶正和乃比ヨリ時の人申けるマテ

青蓮院殿尊應准后

正應三年十二月十六日ヨリ

やむことなき事にこそマテ

下冷泉殿持爲卿

大隅國住人帖佐の平三宗信ヨリ

ありかたき事なりけりマテ

青蓮院宮尊傳親王

右三筆銘々御眞跡無疑心

者也應需證之畢

神田道伴

寛保二季仲冬上旬  
(印)(花押)

繪の筆者については今は失はれたもの、如くであるが續類從に載せる詞の奥書によると前記添狀の外更に左の一通があつた。

證朱印

山王利生記之繪 一軸

右當家之流前兵部少輔

入道寂濟筆尤無疑者也

仍 如 件

寛保三年十一月八日土佐左京近光芳  
朱印

以上のうち詞書筆者に關する古筆の鑑定に何程の根據ありしやは今之を明かにし難いが、蓮華寺本上卷第一段及井上家本第一段の詞書は同筆と認められ、兩者の關係を明かにしてゐる。畫家に關しては右の如く土佐光信筆の傳稱も古くあつたもの、やうであるが、粗々六角寂濟に歸せられてゐる。今四卷を通じて人物、樹木、土坡、山巖、水波、雷雲等に於ける描寫様式を細視するに必ずしも廓然と同一手筆に出づるものとは斷じ難いのであるが、先づは同一畫風として攝取し得るに庶幾いやうである。かく云ふ意は更に後述するところによつて明かにしたいが、茲に寂濟は云ふ迄もなく、應永二十一年頃の製作に係る清涼寺所藏融通念佛緣起繪卷の上卷第一段の繪の裏に「前繪所預藤原朝臣前兵部少輔入道寂濟(花押)」の款記を留むるによつて、その繪の筆者として著聞し、應永三十一年二月三日七十七歳にして示寂せる(滿濟准后日)畫家である。彼此の繪を比較するに、胡粉を以て重く輪廓を引く裝飾的な霞の煩用に於て先づ最も近似するが、更に前代の繪



















山王靈驗記繪卷

滋賀生源寺藏



山王靈驗記繪卷

滋賀生源寺藏





巻に見られた豊かさに替る描線の硬化と描寫力の衰退等當代繪卷に共通する一般的特色の上に立つて、兩者の間に猶多少の様式的な親近さを見出し得ないではない。しかし、たとへ融通縁起繪は各段に當代畫人等が特に畫技の精を競つた如き事情があるにしても、山王は畫技と畫格とに於て彼に一籌を轡する位置に在ると云はねばならない。想ふに之等現存四卷は、鎌倉末、室町初葉に於て作られた山王靈驗記繪の傳寫本なのであつて、この四卷何れも詞、繪を通じて天地に界線を附して餘白を残せるはその傳寫本たる性質を示すものと云ふべきである。而してこゝに想定せらるゝ原本は恐らく數人の畫家の手に成つたものであつて、かゝる點に、先きに吾人が、現存四卷を必ずしも同一手筆に歸するものと斷じ得なかつたやうな描寫様式上の疑問の湧き得る事情が潜在するのではなからうか、との考へ方がなされるかも知れぬが、かゝる摸本作成の態度は近代に於けるものであつて、當代に於ては殆んど考へ難いものであらう。而してこの山王に於て最も妥當なるものは數人の畫家の共同作業であると思はれる。たゞその傳寫の時代に就いては融通以後多少降るべきを想ふものであるが、正確には勿論究め難い。

古く山門に於て製作され、或ひは存在した繪卷としては保元繪平治繪（看聞御記、永享八年五月卅日條）、後三年合戰繪（池田侯爵家、藏繪卷序文）、隆光筆足引繪（看聞御記、永享八年六月廿五日條以下）等が直ちに想起されるが、山王靈驗記も蓋しその中で、現存本の如きはその原本との關係は、年代的に粗々現存あしひき繪（小林一本誌第八十本號參照）に對する隆光筆本と平行するやうな關係に在るものであらう。

う。

（註一）爲念、兩日の間にある言繼刺記の記事を抄出する。

（八月五日）自禁裏日吉社緣起十五卷被出之比叡山へ可返遣之由有之、

（八月廿一日）叡山東谷月藏房弟子三位來、三王緣起淨土寺殿御覽有度之由申、

九卷先渡之候了、

（九月二日）一條殿右府、日吉靈驗繪御一覽御望之由候間、此方之分六卷進候了、

（九月十九日）自叡山東谷月藏坊松茸一籠十本送之、日吉靈驗繪明日可取進之由有之、

（註二）こゝで一應省みて置かねばならないのは、日枝神社本である。續類從本第五卷は之と類似の内容乃至行文をもつものであるが、日枝神社本は恐らく最初から一卷を以て完結せるもので、弘安十一年施入の奥書を以て、集成された山王靈驗記繪の成立年代を考へることは恐らく出来まい。

（註三）帝室博物館には山王繪の二通りの摸本がある。増訂考古畫譜の眞頼の補に一卷の物と云ふは會心齋の跋文ある井上家本の摸本を指すが、二卷の物と云へるは白描略彩の本で、うち一卷は同じく井上家本、他は生源寺本及び現存四卷以外の一巻を繪のみ抜寫したもので、倭錦に寂濟、詞、徹書記、正般、正廣、堯孝と云へるものに當る。共に廣通寫しの再寫本である。

#### 附記

一、井上侯爵家山王靈驗記については櫛に昭和十年東京帝室博物館に於ける名作屏風繪卷特別展の際發行された繪卷物圖録に田中一松氏の解説がある。尙同本の圖版は編輯の都合により追つて次號に載せらるゝ筈である。

一、諸本調査に當り所藏各位の御好意を得たることを茲に謝すると共に、特に蓮華寺本調査に際し土居次義氏の寄せられた御好意を謝する次第である。